循環器病専門施設見学

関西労災病院

聖隷浜松病院循環器科　中林圭介（なかばやし けいすけ）

はじめに

今回，日本循環器学会のご厚意により，循環器病専門施設見学という貴重な機会をたまわり，独立行政法人関西労災病院循環器内科の見学をさせていただいた．筆者は現在静岡県浜松市の市中病院で，カテーテルインターベンションを中心とした診療に従事している．general cardiologist を志ざし，昨年循環器専門医を取得した機会に，今後の将来像について subspecialty を中心に考えた．元来外科志望であった筆者が，循環器内科に進んだきっかけは研修医時代にみた急性心筋梗塞のダイナミックな臨床経過である．今でも治療成功時の達成感や良好経過をたどった際の喜びは代えがたいものがある．このインターベンショニストとしての矜持を持ち続け，磨き続けるために必要なことを考えた．昨今，インターベンションは冠動脈にとどまらず，下肢・頸部・腎動脈など全身血管に対象を拡大し，学会の充実・ソーシャルメディアによる情報の共有およびデバイスの進化のため，手技自体は完遂できることが多い．しかし，新規の分野になればなるほど，それが本当に正しいことであるかを判断することは難しい．日常臨床診療のなかで，自身の知識を up-date するとともに，データを発信していく必要を痛感している．そこで，今回同じく市中病院でありながら，臨床実績と同等に数多くの evidence を発信する関西労災病院に，その理念や方針を見学させていただくべく依頼をしたころ，快諾していただいた．以下に病院概略と見学内容を記す．

病院概要

関西労災病院は兵庫県尼崎市に位置し，電車では新大阪駅から約20分，新神戸駅から約30分，また車で伊丹空港から約20分，神戸空港から約１時間と絶好のアクセスを誇る．高校野球の聖地・甲子園球場へもなんとか徒歩圏内である．一方で病院からは武庫川も望め，都会の喧騒からは一歩離れた場所にあり，非常に落ち着いた雰囲気を醸し出している．

昭和25年に尼崎商工会議所が中心となり労働省へ病院設置を要望し，昭和28年に病床数50床で診療を開始し，平成７年の阪神大震災の際も関係機関の協力を得て診療を継続した．平成10年から循環器科を標榜し，平成19年には心臓血管センターを設置（CCU ８床），現在の642床となった．現在45万人を超える尼崎市医療圏の中核病院として，勤労者医療と地域医療の推進に取り組んでいる．

そのなかで循環器内科は同院の中心的存在である．上松正朗部長を中心に general cardiologist であることを前提に，血管内治療チーム，不整脈および心不全・画像診断チームの２チーム制をとっている．それぞれ，2015年は PCI 715例，EVT 834例，カテーテルアブレーション429例および心臓エコー検査6,972例など全国トップクラスの臨床実績を有している．そうしたなかで際立つのは，大阪大学をはじめとした他施設との共同研究も含めて，2014年度だけでも多くの国外発表（12件，演者）および英語論文（13件，筆頭演者）と積極的な研究活動も行われている点にある．ま

図1　ホスピタルパーク・いぶきの園．関西労災病院ホームページより．

た，スタッフ・後期研修医ともに同院研修医からの繰り上がりが多く，初期研修病院としても人気があるが，実際に働きやすい環境が整っていることが示されている．

見学内容

最寄り駅である立花駅から改札を出ると，バス停に向かう途中で案内板があり迷うことはない．バスの車中で2人の淑女が『労災病院に行くの』『あら，私も』と話している．8分程で到着したが，車内の半分以上の人が降りていく．地域に浸透していることが実感できた．敷地内に入るとすぐ左手に，ホスピタルパーク・いぶきの園が広がっている（**図1**）．3月上旬の見学時期では若干もの寂しい雰囲気であったが，春になるとソメイヨシノなどの様々な華が鑑賞できるそうだ．なお，この園は園芸療法士と協力し，治療やリハビリテーションの一助となっている．正面玄関は吹き抜けの開放感あるつくりとなっており，非常にわかりやすい総合案内所が患者さんや訪問者を導いてくれる．

まずは病棟を案内していただいた．CCU 8床はほぼ常に満床であり，昨年度は約150例の急性心筋梗塞症例が搬送されている．心臓手術後重症例も入床しており，心臓血管外科との連携も取りやすい環境にある．隣接するHCU 12床も挿管管理下のような急性期重症例の対応が可能であり，パラメディカルの実力も推し量れる．同階にある53床の一般病棟では，慢性期症例や予定カテーテル症例が入院している．これらの病棟は三角形を2つつなげたような形状をとっており，八の字を書くように歩くと，一周回診できる．ひとつ印象的であった出来事があった．見学中に他院から特定の検査のために1泊転院を受けていたことである．公開講座や病診連携に非常に積極的であり，顔のみえる関係性が確立しており，地域基幹病院の持つハード面で優越性を地域として共有していることは見習うべき姿勢だと感じた．また，救急外来・ICU，透析室，リハビリテーション室および各種検査室なども同じ棟にあるため，必要時にはすぐに顔をみて相談ができる．

次いでカテーテル室を拝見した．島津製作所，TOSHIBA，SIEMENSの3台のシネアンギオ装置がフル稼働している様は，興奮を禁じ得ない（**図2左**）．同日は各々PCI，EVT，カテーテルアブレーションが並列で行われていた．なお術者は全員筆者と同学年もしくは年少であった．そして各チームの主任がその手技を評価し，時に厳しい助言や支援を送る．緊張感と責任感を惹起する絶好の環境であると羨望を感じた．なおPCIを行う前には500例のCAGと，その適正さが認められることが要件であると伺った．健全な競争意識が感じられる．見学当日はPCIが8件，EVTが5件，カテーテルアブレーションが3件と密度の濃い予定表となっていたが，術者らの表情がいきいきとしていたのが印象的であった．2016年1月にはハイブリット手術室も完成し（**図2右**），ま

図2　木目調の外装で落ち着いた雰囲気のシネアンギオ装置（左）と白基調に青いラインが引き締まった印象を醸し出すハイブリット手術室（右）．関西労災病院ホームページより．

すます対象領域を拡張していくことが予想される．関西労災病院ではこの圧倒的な症例数から，インターベンションに関する論文も多い．正直なところ，見学に行くまでは専門の方がデータ管理されているものとばかり思っていた．しかし，実際には秘書さんが一人のみで最低限の情報を入力してくれており，術者がほとんどのデータベースを構築しているとのことであった．臨床研究に対する高いモチベーションを感じる．これは後述するが，研究なくしてよい臨床家足り得ないという考えが科のなかに一貫して流れているのであろう．

外来はまさに市中病院であり，比較的小さなブースで各科が隣り合わせに診察を行っていた．そうしたなかでひとつ気になるものを目にした．病理解剖に関するアナウンスである．恥ずかしながら現在筆者は自科で病理解剖があった際には，興味をもって所見を確認するが，他科で行われた際に，同様の熱をもって挑めるかというと自信がない．各内科で行われた病理解剖を知らせるそれは，他科の症例からも積極的に学ぼうとする病院の意思を表していた．また昨今はハートチームの概念から循環器内科・心臓血管外科カンファレンスは必須であるが，それだけでなく関西労災病院では各内科合同カンファレンスも行われている．耳学問の舞台として好評のようだ．こうしたカンファレンスの存在からも各科の敷居の低さと，良好な関係性を築いていることが伺い知れた．

ほかにも様々なカンファレンスが毎週行われている．全体として抄読会を兼ねた連絡会，ハートチーム検討会および症例検討会，グループ毎に不整脈カンファレンス，EVT 症例検討会，心不全カンファレンスおよび重症下肢虚血カンファレンスで，個々人の症例を全員で共有しようとする姿勢を強く感じた．また，ユニークかつ大変興味深いものとして，年に 2 回土曜日もしくは日曜日の半日を要して行うプロジェクト検討会がある．これは『抄録・口頭発表・論文作成 虎の巻（南江堂）』の著者でもあり，同院副院長兼循環器内科部長の上松正朗先生を中心にして，各自が今までの研究報告と今後の研究内容についてプレゼンテーションを行い，全員の前で批評にさらされるという，大変有意義ではあるが負荷の大きいカンファレンスである．この時点でプレゼンターは既存データをまとめて，仮説から結果・考察を含めて前著で詳記される設計図と呼ばれる 1 枚の A3 用紙にまとめる．そこで目標の学会もしくは journal を選定し，n を増やすのか，新規の視点を加えるかなど，採択に向けて知恵を出し合う．この段階は日本語で行われ，論理の破綻がないことを確認していくため，最終的に英語化への時間短縮にもなる．また，ここで共有することに症例のリクルートも明確になり，チームとしての共通意識も高まる．もちろん，研究関係のため子細を伺うことはできないが，ここに多忙を極める市中病院でありながら，世界へ発信している病院の原点があると確信する．

最後に職員食堂で鰆焼き定食をいただきながら，終日施設案内をしてくださった副部長の藤田先生とお話をさせて頂いた．臨床と研究は医療の両輪であり，研究をしなくても臨床できるが，研究をしないでよい臨床を行うことは難しい．臨床

医が研究を主にして，臨床に悪影響が出ることは許されないが，本気で臨床をやっていれば，研究を行う必要に迫られるはず．最後に，『うちのレジデントの先生はじめ，みんな本当によくやっている』と笑顔で仰っていた．責任と裁量権を与えてくれる先輩とそれに全力で応える後輩の非常に理想的なチームバランスだと感じた．

私事であるが，現時点でここまで自分を追い込めているかと問われると自信がない．今回の見学を通じて，自身の甘さを痛感でき，今後の臨床・研究生活に対して，大きな転換を考えなければならないと思っている．

おわりに

今回，関西労災病院の診療・研究体制を拝見させていただき，貴重な経験を得ることができた．非常に多くの症例数を誇り，特にインターベンションを subspecialty に志すものにとって，非常に魅力的な循環器専門医施設であると感じた．また全国トップクラスの忙しさを誇るであろう日常診療のなかで，自己の治療を客観的に評価していこうとする姿勢は，一朝一夕にできるものではないが，あらゆる市中病院が見習うべきものがあった．

最後に，大変お忙しいなか，終日丁寧に案内してくださった藤田雅史先生をはじめとする循環器内科スタッフの方々，そしてこのような貴重な機会を与えてくださった日本循環器学会，潤滑なコーディネートをして頂いた南江堂関係者の方々に深く感謝申し上げます．

＊　＊　＊